Richard Ettinghausen, Oleg Grabar,
and Marilyn Jenkins-Madina
Islamic Art and Architecture
650-1250

Yale University Press, New Haven and London, 2001, xiii + 344p.

鎌 田 由美子^{*}
KAMADA Yumiko

本書は、基本研究書として重要視されてきた『イスラーム美術と建築650-1250』の改定版である。ここ25年の研究成果が反映されており、イスラーム美術史・建築史研究における現時点でのコンセンサス、研究動向、最新の文献を知ることができる。以下に、初版と比較しながら、改訂版の内容と特徴を紹介したい。

I. 著 者

初版は、ニコラス・ペヴスナーが編集した、世界の建築・美術を扱うペリカン美術叢書の一冊として企画された。美術を担当したのは、広範な様式・イコノグラフィー研究により、イスラーム美術史に多大な貢献をし、ミシガン大学・ニューヨーク大学で後進を育てたエッティングハウゼンである。建築は、その一番弟子で、イスラーム建築や初期イスラーム美術について多くの著作があるグラバルが担当した。1965年ごろまでにほぼ完成していた草稿は、エッティングハウゼン没後、グラバルによって加筆され1987年によりやく出版された。その後、ブルームとブレアにより、1250年以降を扱った続編、⁽¹⁾『イスラーム美術と建築1250-1800』がペリカン美術叢書としてカラー図版を含むA 4判で出版され、これを受けて初版を全面改訂する運びとなった。改訂版である本書では、建築をグラバル、美術をメトロポリタン美術館の学芸員であるイスラーム陶器専門家、ジェンキンス＝マディナが担当している。

II. 構 成

イスラーム美術・建築の形成と発展を時代順に記述するというスタイルは踏襲しているものの、初版と改定版ではイスラーム美術史を論じる際の区分が大きく異なっている。従来、王朝が区分として用いられてきたが、地域的な重なりや、芸術的趣味や文化一般

^{*} 東京大学大学院修士課程
M. A. Student, The University of Tokyo

の共有という現象を考え合わせると、王朝を区分として用いることには困難がつきま⁽³⁾う。実際、初版では、第一部を「カリフ時代」、第二部を「カリフ制の崩壊」として王朝ごとに記述しているが、王朝ごとには論じられなくなる第三部「11世紀から13世紀」では、地域ごとの記述に転じている。これに対し、改訂版では、従来のように王朝ごとに区分するのではなく、地域ごとに区分する方法を用い、650年から1250年までを1000年を境目として2部に分け、第一部を「初期イスラーム美術と建築 (c. 650–1000)」, 第二部を「中世イスラーム美術と建築 (c. 1000–1250)」としてそれぞれ3章ずつ、中央イスラーム世界(エジプトからメソポタミア平原まで)、西方イスラーム世界(大西洋からリビヤまで)、東方イスラーム世界(ザグロス山脈・アナトリア東部からインダス河・中央アジアのタリム盆地まで)の建築・美術について記述している。

各章は、「建築と建築装飾」「物品芸術 (art of the object)」「写本芸術」から成っている。建築以外のイスラーム美術品を「物品芸術」か「写本芸術」に分類するという手法も革新的である。絵画を特異な分野として重視するヴァザーリ的な考えはイスラーム美術には適さないとして、「絵画」の項目は立てられず、壁画は「建築と建築装飾」、写本絵画は書や製本などとともに「写本芸術」の項目に分類されるようになった。また、西洋美術史におけるヒエラルヒーと密接に関わる「装飾美術」という表現に代わり、「物品芸術」という表現が用いられ、生活に関わるあらゆるものを美術的・技術的に高度なものへと発達させたイスラーム美術の実情に合うものとなっている。西洋美術史研究の方法によって研究されてきたイスラーム美術史は、その記述に際しても西洋美術史の枠組みを適用する傾向にあったが、改訂版ではイスラーム美術の特性を踏まえたイスラーム美術史独自の記述方法を提示しており、その点も大きな変化である。これに、イスラーム美術が発生した風土の美術史的な背景を説明した序章と、イスラーム美術の影響を論じた最終章を加えた8章で構成されている。

III. 内 容

ここ25年の間になされた考古学的調査・発掘報告、展覧会カタログやシンポジウム、研究論文を反映して、記述内容はより正確で広範囲にわたるものとなり、初版で手薄だったアラビア半島、12–13世紀のシリア・イラク・アナトリア、西方イスラーム世界のターイファ時代の記述が拡張された。建築を担当したグラバールは、巻末の注に新しい研究論文や異なる見解を加筆しているものの、基本的には初版の本文を踏襲しており、図版も新たな数枚のカラー図版を除けば、初版とほぼ同じで白黒のままである。それに対し、美術を担当したジェンキンスは、最近の研究で知られるようになった美術品の図版を提示しながら、エッティングハウゼンの初版を大幅に書き換え、時に大胆な新説を提示し

ている。全体を通じ、改訂版で手加えられた部分のほとんどがジェンキンスによっている。カラーを含む約500枚の図版は、時代や制作地を確定できる作品を中心に選ばれ、年代の不明な作品を分類する際の助けとなるよう工夫されている。しかし、銘文で確認されない限り図版の説明には推定されうる制作地・制作年代が明記されないのが、本文に立ち返らねばならず不便である。また、画質の劣悪な図版が数枚含まれている点も惜しまれる。以下、章ごとに初版と比較し、是正された箇所、新しく加えられた情報を中心に見ていく。

まず、第1章はイスラーム美術の定義・特性、その成立の風土的背景を説明している。新たにラフム朝（3世紀半ば－602年）、ガッサーン朝（4世紀－636年）などのイスラーム以前のアラブの王朝の記述を加え、イスラーム以前のアラビアには美術的に見るものがなかったという初版の見解を改めている。また、近年の発掘調査により、ムスリムによる征服直前には衰退していたと考えられていたシリア・ヨルダン・パレスチナ・中央アジアは、実際には経済的に繁栄していたことが明らかとなり、物質文化の側面においてイスラーム以前と以後で断絶が見られないと述べる。

第1部「初期イスラーム美術と建築 (c. 650－1000)」第2章「中央イスラーム世界」では、イスラーム文化の形成に重要な役割を果たしたウマイヤ朝（661－750）・アッバース朝（749－1258）時代の文化を扱う。最近の研究を反映して岩のドーム、ダマスクスの大モスクの記述が増えている。また近年の発掘により、モスクが造られるようになって1世紀後には各地で地元の伝統を取り込んだ多様なモスクが建てられていたことが明らかになり、9ドームタイプのモスクもここに位置づけられている。この時代に、この後1000年にわたってイスラーム美術の基盤となるものが形成されたとして、新たに宝飾品や貨幣、ガラスも考察に含んで美術作品を詳述している。特にアッバース朝時代の陶器はよく整理され、イラクのバスラが陶器装飾の先進技術を独占し、それがイスラーム世界の各地で模倣される様子が明らかにされている。征服地の美術を取り入れ、それを宗教的コンテキストでの人物・動物表現の忌避など、イスラームの実情に適應するものに变化させて発生したイスラーム美術は、アッバース朝時代の中心的な都市で完全な成長を遂げ、これが東西イスラーム世界へと伝播していく。

第3章「西方イスラーム世界」では初期の西方イスラームの中心地、アグラブ朝（800－909）のイフリーキーヤと後ウマイヤ朝（756－1031）のアンダルスを扱う。従来の王朝ごとによる区分では、アンダルスを除くマグリブの美術はアッバース朝、ファーティマ朝の美術の一部として扱われてきたが、地域で分けた改訂版ではより正確に初期マグリブ美術を提示することが可能になった。その草創期を形成する重要な要素として、ギリシア・ローマの美術、ダマスクス・バグダードなど中央イスラーム世界の美術を指摘し、

それら二つをつなぐ地中海の存在について強調する。

第4章「東方イスラーム世界」ではホラーサーンとトランスオクシアナを中心に、君主と土地所有者・商人階級などの富裕層がパトロンになって、サーサーン朝(224-651)やソグド文化に由来する土地の文化と、バグダードと密接に関わる汎イスラーム的アラブ文化が融合され、現代ペルシア文化の基礎が築かれる様子が描かれる。サーマーン朝(873-999)はペルシア語とペルシア文学を奨励したことで知られ、イラン北東部はバグダードに匹敵する独自性と卓越さを備えるようになる。その成果は次第にイラン西部に伝えられ、ブワイフ朝(932-1062)時代にはレイが重要な役割を果たすようになるが、この実験的な時代は11世紀初めで幕を閉じる。10世紀以降、ガズナ朝(977-1187)、セルジューク朝(1038-1194)などトルコ系の王朝が出現し、文化的にはいっそう複雑さを増すが、その様子は第2部第5章にまとめられている。

第2部「中世イスラーム美術と建築(c.1000-1250)」が扱うのは、アッバース朝権力の低下、地方権力の台頭、スンナ派の弱体化、バグダード、コルドバに加えて文化の中心地としてのカイロの出現、レコンキスタ・十字軍などキリスト教勢力による圧迫など、大きな変化を見る時代である。従来11-12世紀は「セルジューク朝時代」として扱われてきたが、セルジューク朝はイスラーム圏の一部にすぎず、西方イスラーム世界にほとんど影響を及ぼしていないため、不適切であるとして「中世」の呼称を採っている。この時代は異民族の侵入、都市の発達、スンナ派の復興に特徴付けられ、美術にもその反映を見ることができる。

まず第5章「東方イスラーム世界」ではガズナ朝、セルジューク朝を中心に、この時代が、建築・美術、特に陶器の分野において非常に創造的であったことを述べる。建築分野における焼成レンガ、ムカルナス、ドーム、ヴォールト、4イーワーン・プランの使用に対する言及に加え、新たにこの時代建築を支配する幾何学的原理に関する考察も示唆されている。また美術の分野では、初版では東方イスラーム世界におけるラスタール彩の発展がファーティマ朝の工人の移動によるものであるとする意見に懐疑的だったが、現在はこれが通説であり、改定版もこの意見をとっている。君主・商人をパトロンとする、この東方イスラーム世界における建築・美術的革新は次第に中央イスラーム世界へと伝播していく。

第6章「中央イスラーム世界」は、「6-1：ファーティマ朝下のエジプト・パレスチナ・シリア」「6-2：セルジューク朝、アルトゥク朝、ザンギー朝下のイラク・アナトリア・シリア・パレスチナ・エジプト」の二部構成になっている。ファーティマ朝(909-1171)と6-2の封建諸君主たちはイデオロギー的には対立しているが、趣味や中世文化一般は共有している。ファーティマ朝美術の一貫性に鑑みて、1000年という本書での区切

りを例外的に無視して、10世紀初めのイフリーキーヤの建築からカイロの発展まで通して解説しており、理解しやすい。6-1のファーティマ朝美術に関しては、初版の説がかなり書き換えられている。カイロ建築には汎イスラーム的な変化のみならず、ロマネスク建築と同調する面も見受けられること、金属による動物彫刻がロマネスク彫刻のプロトタイプになった可能性があることなど、キリスト教美術との繋がりに関する言及が増えている。また、キリスト教教会にはめ込まれた陶器皿や、トルコのセルチェ・リマニ沖の沈没船の調査から、新たに各種の陶器が分類され、製作地・年代が比定された点が本文に反映されている。しかし、いくつか疑問も残る。まず、「ピサのグリフォン」と呼ばれる有名な青銅製の動物像は、11-12世紀のターイファ時代のスペインで制作されたとする説が現在では有力であるにもかかわらず、初版同様ファーティマ朝のものとして扱っている。また、通常イランのものと考えられるラカビー陶器をシリアのテル・ミニ出土のものと比較して11世紀シリアに分類する説や、ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂収蔵の有名なカット・ガラスのボウルをファーティマ朝のものとする説は決して定説とはいえない。

6-2の建築は、1.イラク、2.ジャジーラ、3.シリア・パレスチナ・エジプト、4.アナトリアに分けて、近年の発掘調査・研究をもとに詳述し、最近の見解を反映してシリア・アラブのモニュメントをスンナ派勢力復興の誇示と捉えている。美術も全体に記述が詳しくなり、特に陶器はシリアと、初版では陶器に関して全く記述のなかったアナトリア（コンヤ）を二つの伝統として想定している。中央イスラーム世界では支配者階級、商人階級が建築・美術のバトロニッジを担い、それを求めて工人が移動したため地域的な差異よりも類似性の方が大きくなっている。

第7章「西方イスラーム世界」では、最近の発掘で様子が詳しく分かるようになったムラービト朝（1056-1147）マラケシュのクッバ・アル・バルディーンや、スペインのムスリム小君主によるサラゴサの宮殿を通じ、西方イスラーム建築の独自性が考察される。かつてコルドバを中心に見られた、自然主義的で華やかなアカンサスやパルメットによる建築装飾は、次第に固く反復的なものになるが、これを従来のように趣味の衰退と考えるのではなく、ベルベル王朝の新しい趣味や深い意味合いの反映として捉えようとしている。従来のように西方イスラーム世界を大きなイスラーム文化のひとつとしてみると、この時代は中央・東方イスラーム世界ほどの創造性がないように見えるが、本書ではこの時代をマグリブの、地中海の独自の文化圏として捉え、その結果、多柱式プランの可能性を探った点や、すでに存在した装飾言語を複雑で力強いものにした点に創造性を認めて積極的に評価している。また、1010年代に中央マグレブ、アンダルスに分裂したイフリーキーヤのジール朝（972-1148）が、アッバース朝の美術伝統やファーティ

マ朝美術の要素を、マグリブの諸王朝やアンダルスの小君主に伝えた様子を美術品の考察により示している。

第8章は「イスラーム美術と非ムスリム」というタイトルで、イスラーム美術が他の文化にどのように認識されていたかを探る。イスラーム美術は、その技術的な卓越さや世俗性、美術品の持ち運びのしやすさのために、非ムスリム文化圏においてもよく知られていたが、従来のように単に影響関係を指摘するのではなく、イスラーム美術品を模して作られた美術品から、その文化圏でイスラーム美術がどのように評価・鑑賞されていたかを探ろうとしている。コプト美術やシチリアの美術、キリスト教美術とイスラーム美術の関わりもすべてこの章にまとめられている。

IV. 本書の意義

本書は、アラブの美術、初期キリスト教美術、サーサーン朝の美術など、征服地からさまざまな要素を取り込み、それを宗教的コンテキストにおける人物・動物表現の忌避など、イスラームの実情に適応させることによって形成されたイスラーム美術が、イスラーム世界の各地に伝えられ、その土地の美術伝統や技術に合わせて独自ものに变化していく様子を鮮やかに記述し、イスラーム美術に内在する「採用と適応 (adoption and adaptation)」という本質的な特徴を明らかにしている。広範囲にわたり一貫して見られるこのダイナミズムはイスラーム美術に固有であり、章を進むごとに読者はその魅力に引き込まれることだろう。またイスラーム美術の作品には、地域色のみならずその時代の政治・経済・思想といった社会状況が反映されており、イスラーム文化や社会を理解するうえで、さまざまな分野のイスラーム研究者にとっても示唆に富むものであろう。本書は、イスラーム美術を解釈する理論書ではなく、あくまで発掘や調査によるデータに即して記述されたものであり、今後の課題や未解決問題も提示されているので、読者はそれぞれの関心にそって巻末の詳しい注と文献から、考察を深めることができるようになっている。こうした研究書を共通理解に、イスラーム美術と考古学、歴史・思想の分野が共同して研究を進めていくことが望まれる。

注

- (1) R. Ettinghausen & O. Grabar, *The Art and Architecture of Islam 650-1250*, Harmondsworth/New York, 1987; rep. New Haven/London, 1994.
- (2) S. Blair & J. Bloom, *The Art and Architecture of Islam 1250-1800*, New Haven/London, 1994.
- (3) 王朝による区分を廃し、時代と美術作品の種類を区分に用いて600-1800年のイスラーム美術を論じたものに S. Blair & J. Bloom, *Islamic Art*, London, 1997 (梶屋友子

訳『イスラーム美術』岩波書店，2001）がある。